

平成二十六年 度 学 力 検 査 問 題

国 語

(九時二十五分～十時十五分)
(五十分間)

注 意

1 解答用紙について

- (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
- (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄まゝ二か所に受検番号を書きなさい。
- (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
- (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
- (5) 解答用紙の*印は集計のためのもので、解答には関係ありません。

2 問題用紙について

- (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
 - (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十二ページです。
- 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

小学校五年生の喜樹は、代々林業を営む大沢家に生まれ、父の正彦が林業を継がなかつたため、祖父の庄蔵から跡継ぎとして期待を受けている。

喜樹は、庄蔵から百年杉伐採の見学に誘われ、同行を希望した。見学には喜樹の姉の楓も加わったが、伐採には危険が伴うため、両親も付き添うことになった。冬休みのある朝、喜樹たちは、庄蔵と木こり職人の忠一(つんつあん)、清次(せいちゃん)とともに山へ向かった。

百年杉が、ずんとそびえていた。

空を指すことだけを覚えて生きてきたかのように、太い幹がまっすぐに伸びている。

喜樹は、木肌に触ってみた。かさぶたのような茶色い木の皮は、思いのほかしくりとしている。内側から手の平をぐっと押し返されるような感触に、喜樹はハッとした。

(百年杉……、こいつは、確かに生きている！)

「喜樹、そっち側から手をよこしてみて。」

楓が杉に抱きつくように両腕を回した。

「ほら、はやくー！」

① 楓の声にせつつかれ、喜樹も手を伸ばした。

(うわあ、すげえ太い。そのうえ、ごつごつしてすげえかたい！)

喜樹は、(おれが百年以上を生き抜いた証しを覚えておけ！)と、杉の大木から自分の両腕と腹全体に、刻印されているような気がした。

庄蔵が、せいやんとつんつあんと並んで、百年杉の幹の周りに立った。そのまま、木に向かってすつと手を合わせた。

楓が喜樹の横腹を突き、「手を合わせろ。」と唇を動かした。

喜樹は、自分まで神妙な姿をすることが、気恥ずかしかった。けれども、その場に漂う神聖な気配に押され、楓にならってそつと手を合わせた。

目を開くと、せいやんが、閉じた唇にぎゅつと力を込め、腕組みをして杉を見上げているのが見えた。

楓は、気持ちが高揚したように、上ずつた声で喜樹にささやいた。

「見て、ぞくぞくするよ。さすが木こり職人だね。どうやって木を伐るか、イメージしてるんだよ。」

② 喜樹は、思わず息をのんだ。ひとり、静かに考え込むせいやんは、いつもよりもひとまわり体が大きく見えた。百年杉を伐り倒すという仕事の大きさが、喜樹にも伝わってくる。

つんつあんと庄蔵が、杉の枝先や、周りの木の間隔を指差し確認しながら、真剣な表情で相談を始めた。

ブルルルルブンブン。

離れていても、チェンソーの音が鼓膜を激しく震わせる。

「ここが伐採の醍醐味だ。喜樹も、『ツル』という言葉覚えておくといいぞ。せいやんは、つんつあんの少し高めを切っているだろう？一度に切ったら木はとんでもない方向に倒れてしまう。だから、追い口と受け口の間に、『ツル』という間隔を残して、ぎりぎりまで木を繋ぎ止めておくんだよ。」

喜樹はぎよつとして振り返った。声の主は正彦だった。

「ツルのあつかいひとつで木の倒れる方向が決まる。ここからは、せいやんの職人技だなあ。」

「すごいなあ。父ちゃんも、山にくわしかったんだ。」

「本でちよつと読んだだけさ。」

正彦は、力なくほほ笑んだ。

その間に、せいやんが何度か足場を変えながら、太い幹を切り進んでいった。一旦チェンソーが止まったところで、つんつあんが、腰の袋から小さな楔を取り出すと、斧を右手でつかんだ。

「あれ？ 斧で木を伐るの？」

「こっちに来てごらん。あの斧は、ヨキと呼ばれているんだよ。木を割ったり枝を切ったりと、山では大活躍する道具だ。楔を打ち込むときには、ああしてハンマーの代わりになる。」

正彦が、自分の前に喜樹を立たせ、つんつあんの手の中のヨキをまっすぐに指差した。

つんつあんが大きな楔を追い口にぐつと差し込み、ヨキを振り上げた。カーンカーンと音を立て、力いっぱい打ち込んでいく。

庄蔵が、待避所に向かつて走ってきた。いよいよ杉が倒れるのだ。

杉がギギギとにぶい音を立てながらゆつくりと傾き始めた。

喜樹には、目の前の光景が、まるでスローモーション映像のように見えた。

バキバキメキメキというけたたましい音が、山の空気を切り裂いていく。

折れた杉の小枝が、ばらばらと火花のように散っていく。

(あぶない！)

心の奥で、危険を知らせるアラームが鳴り響くのを感じて、喜樹は思わず、正彦の腕にぎゅっとしがみついていた。

百年杉は、木立の隙間を、ちようどねらったように倒れ込んでいく。根元がぱっくり開き、切り

口が白い円の形になって目に飛び込んできた。

ズドドーン！

すさまじい音が山全体を揺らし、木の根元が地面を打って何度か跳ね返る。地面から伝わってきた振動が、喜樹の体をぶるぶると震わせながら頭のとつぺんまでかけ抜けていった。

「おうー！」

「おうー！」

そこにいた皆が、まるで申し合わせたように、いつせいに声を上げた。

喜樹は、自分の体がかすかに震えているのを感じた。

「地響きすごかったよね。これが、百年の重みなんだよね。」

楓が目を輝かせて喜樹を振り返った。

「う、うん……。」

喜樹は、そう言うのがやつとだった。

(木を倒すって、めっちゃくちゃ、すごいことなんだな……。)

喜樹は興奮が冷めずに、しばらくの間頭がぼーつとしていたが、つんつあんのOKの合図で、倒れた杉に歩み寄った。

折れた枝から噴き出した杉の香りが、ふわっと顔を打つ。

せいやんは、切り株のまわりの木屑を手で払った。

喜樹の目が、白い切り株にとまった。

「あれ？ 切り株って、平じゃないんだね。」

切り株の表面は段々になつていて、境がぎざぎざに毛羽立っている。

せいやんは、喜樹の言葉がよほど面白かつたのか、白い歯を見せて笑つた。

「ハハハ、何もわがんねえと、切り株はスパツとまっ平になるもんだと思うんだべな。この低い方が受け口で、高い方が追い口だ。ぼさぼさになつている境がツルだ。木が倒れるときにすごい音がするべ？ あれはツルがちぎれて折れる音なんだわ。」

「そうなんだ！」

喜樹は大きくなすいた。正彦が教えてくれた木の伐採方法と、目の前の切り株、そして耳に残るメキメキという音が、パズルをぴたりとはめ込んだように合わさつた。

つんつあんときせいやんが、メジャーで杉の直径を測つていく。

「根元が一メートル十センチ。樹高約四十メートルつてどこかな。」

「これは、目の正直な上物だ！」

つんつあんは、木目をさすりながら喜色満面だ。

喜樹も、木目のどこが正直なのかと目を凝らす。

庄蔵が杉の切り口を指差し、教えてくれた。

「中心の年輪は間隔が広いけれど、途中から幅が狭くなつていのがわかるか？」

「うん！」

たしかに、年輪の幅は、十年目辺りから細くなつている。

「年輪を見れば、この杉が十歳のときから、先代たちが、枝払いをして手入れしてきたつてことがわかるんだ。枝払いすれば、節がなくなるだけでなく、目がしまつて丈夫で美しい材になる。百年も前の先代たちの仕事を、今こうしてわしらががんばるつてことだ。」

「すごいね、そんなこともわかるんだ。」

喜樹は、山に流れてきた時間の長さに、圧倒されるばかりだつた。

だが一方で、そんなに長い間手をかけ守られてきた杉が、たつた今倒されてしまったことが、なんともあつけなく、あわれにも思えてきた。

「百年以上もかけて育てた木を伐つてしまふなんて、なんだか、もつたないね……。」

すると庄蔵が、喜樹が思わずもらした言葉を、ぴしやりと打ち消した。

「いいや、ちがう。この山は人の手で代々作りあげてきた山なんだ。伐られた木も、家具になり家の材になつて、そこからまた新たに、何十年と生きていくんだぞ。伐つて使うことで木が循環し、山として成り立つていくんだ。」

「ほだよ、喜樹ちゃん。このあとにはまた杉の苗を植える。また新しい木が百年かけて育つていくんだ。それが山の生業つてもんだ。」

せいやんは、地面にどつかとあぐらをかくと、切り株の木肌をなでた。

「この山では、この杉が最後の大物だつたな。あとは、おれのおやじが戦後に植えた木が育つのを、じっくり待つこつた。」

庄蔵は、そう言うとき喜樹の顔を見た。

—— 今度はお前が山を育てる番だぞ。

喜樹には、庄蔵の目が、そう言つていふように思えた。

⑤ 急に目の前の山が、ずんと自分におおいかぶさつてくるようで、息苦しい感じがした。

(堀米薫著『林業少年』による。一部省略がある。)

(注) ※チェーンソー……チェーンソーのこと。木材を切断する機械。

※追い口……樹木を伐採するとき、木を倒そうとする方向の反対側に入れる切り口。

※受け口……追い口とは反対側の、木を倒そうとする側に入れる三角の切り口。

※楔……堅い木や鉄でV字形に作った、物を割ったり広げたりするための道具。

問1 ① 楓の声にせつつかれ、喜樹も手を伸ばした。とありますが、百年杉に両腕を回しているときの喜樹の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 直接百年杉の木肌に触れ、そのたくましさで生命力を体全体で感じている。

イ かさぶたのような木の皮の、思いのほかしくりした感触を手の平で感じている。

ウ 楓と一緒に百年杉に抱きつき、山に対する姉の強い思いを感じている。

エ 百年以上生きてきた大木が伐り倒されてしまうことに疑問を感じている。

問2 ② 喜樹は、思わず息をのんだ。とありますが、このときの喜樹の心情を、次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。(6点)

喜樹は、楓のささやきを聞き、腕組みをして杉を見上げているせいやんの体が、

25 35 に気づいた。

問3 ③ ここからは、せいやんの職人技だなあ。とありますが、「せいやんの職人技」の結果が、最もよく表れている一文を本文中から探し、そのはじめの六字を書き抜きなさい。(4点)

問4 ④ 庄蔵が、喜樹が思わずもらした言葉を、ぴしやりと打ち消した。とありますが、次は、庄蔵が喜樹の言葉を打ち消した理由をまとめたものです。空欄にあてはまる内容を、三十字以上、四十字以内で書きなさい。(6点)

庄蔵は、人の手で代々作りあげてきた山では、木は

30 40 ことを、喜樹にわかって

ほしいと考えたから。

問5 急に目の前の山が、ずんと自分におおいかぶさってくるようで、息苦しい感じがした。と

ありますが、このときの喜樹の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 喜樹は、百年杉が伐られ、最後の大物がなくなった山を、どうやって育てていこうかと、希望に胸をふくらませている。

イ 喜樹は、代々の職人たちの仕事や山に流れてきた時間の長さを知り、山を受け継ぎ育てていくという仕事の重さを感じている。

ウ 喜樹は、庄蔵から跡継ぎとしての期待を受けていたものの、林業について自分から知ろうとしなかったことを悔やんでいる。

エ 喜樹は、杉の伐採作業がいかに危険を伴うかを知り、これまで親しみを感じていた山が、急に遠い存在になった気がしている。

2 次の各問いに答えなさい。(22点)

問1 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 厳密な審査を行う。
- (2) 国から県へ管轄を移す。
- (3) 岩かげに魚が潜む。
- (4) 文学作品のヒョウロンをする。
- (5) ヒタイに汗して働く。

問2 次の――部と――部の関係が適切になるように、――部を書き直しなさい。(3点)

私が勉強をするのは、夢をかなえるのに必要な学力を身につけたい。

問3 次の――部の動詞の活用形が他と異なっているものを、ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪^アれた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚^イき、それはいけない、こちらにはまだなんの支度^{シタタ}もできていない、ぶどうの季節まで待つてくれ、と答えた。メロスは、待^ウつことはできぬ、どうか明日に^エしてくれたまえ、とさらに押して頼んだ。

(太宰治著『走れメロス』による。)

問4 次の――部と同じ意味で「長」が使われている熟語を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

彼の長所は、人に親切なところだ。

ア 成長 イ 市長 ウ 延長 エ 特長

問5 Aさんの学級では、ことわざや慣用句、故事成語などについて調べ、話し合いを行いました。次のAさんとBさんの会話を読んで、空欄Ⅰにあてはまる語句を、漢字二字で書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる内容として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

Aさん「ことわざや慣用句、故事成語などを調べると、同じ語句がいろいろな言葉の中で使われていることがわかりました。たとえば、「Ⅰ」の道も一歩から」、「悪事Ⅰ」を走る」、「Ⅰ」眼などには、同じ語句が使われています。」

Bさん「本当ですね。Ⅰ」は、非常に(Ⅱ)を表す語句ですが、ことわざや慣用句、故事成語などの中で広く使われているんですね。」

ア 遠い距離 イ 狭^{せま}い空間 ウ 遠い未来 エ 短い年月

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

私たちは私たちの経験を、たとえば「チューリップの花が咲いた」、あるいは「空が夕日で赤く染まった」というように、「主語＋述語」の形で言い表します。このように判断の形で表現しますと、どうしても、まず「チューリップの花」や「空」という「もの」があって、それにかくかくしかじかの変化が起こった、という印象を与えます。

空が夕日で赤く染まるのを見るという経験は、私がそこに居あわせてはじめて成立するものです。単なる「もの」の変化・運動ではありません。空が赤く染まるということを私は、その場に居あわせて経験しているのです。この経験は、私と「もの」が一つになったところで生じていると言ってもよいでしょう。ところが、それを「空が赤く染まった」と表現しますと、出来事が「もの」のほうへ押しやられてしまいます。経験している私が排除され、ただ単に「もの」にかくかくしかじかの変化が生じたということが言い表されるだけになってしまいます。

言葉はもともと「もの」を言い表すのに適した構造をもっていると言ってもよいと思います。生起している「こと」から必要な部分だけを抜き出して、「もの」とその変化という枠組みのなかにそれを押し込むことで言語表現が成立するのです。そうであれば、言い表されたものは当然、「こと」から離れてしまいます。経験と言葉とのあいだに隔たりが生じてしまいます。そのような意味で、言葉がそのまま経験であるとは言うことができません。

このことを踏まえた上で、いくつかのことを付け加えたいと思います。いまも言いましたように、言葉は、私たちが直接経験している事柄を、一つの枠のなかに押し込めて表現します。そのために言葉には必ず事柄の抽象化が伴うのです。しかし他方、言葉と私たちの経験、あるいは「こと」とのあいだには積極的な関係もまた存在します。

言葉には大きく言って、二つの働きがあります。一つは、ものをグループ分けする働きです。たとえば、これはリングゴである、これはミカンである、これは青い、これは赤い、等々と「もの」を区別し、グループに分けていく働きです。ここでは「もの」だけが問題になっています。グループ分けするときには、いま目の前にしているリングゴの独特の赤い色とか、それ独特の味、あるいは私がそれをどのように見ているかといったことは問題にされません。むしろそのグループに共通の性質で個々のものを一まとめにすることがその場合の唯一の関心事です。

他方、もう一つの働きとして、言葉は「こと」を喚起する力をもっています。もちろん言葉は、これまで言いましたように、「こと」をそのものとして表現することはできません。言葉はバラの花の微妙な色あいや、リングゴの微妙な味を表現し尽くすことができません。しかし、たとえばローテローゼという品種の名前を挙げただけで、それを知っている人のなかに、その気品あふれる美しさをありありとイメージさせることができます。

「ローテローゼの赤」と言うとき、その「赤」は単に色の一つを言い表すだけの言葉ではありません。ローテローゼ独特の美しい陰影を伴った赤色を想起させます。それには、辞書に記された平均的な意味を超えた「ふくらみ」があると行ってよいでしょう。言葉は、言葉による凝固作用によって変質をこうむる以前の生きたものを、その背後にもっているのです。

③ 私たちの具体的な経験のなかで使われる言葉はすべて、背後にこの「ふくらみ」をもっています。「赤い」という言葉は、そのときどきに見たものの独特の色あいをそのうちに含みながら語られます。もちろん私たちの日常生活のなかでは、その「ふくらみ」がつねに主要な関心の対象になるわけではありません。それは多くの場合は「剰余」にすぎません。しかし、美的な経験の現場では、むしろそのほうが主役となり、言葉のほうが「剰余」になります。「赤い」という言葉ではなく、言葉に

なる以前のバラの花の色あいが私たちの全関心を占めるのです。

その場合でも、言葉がまったく不要なわけではありません。簡潔な言葉でかまわないのですが、それによつて「ふくらみ」へと目を向けるといふことが生じます。「ふくらみ」を共有する人のあいだでは、言葉は多くのことを語ります。たとえば、梅雨の時期、雨のなかで咲くあじさいの花には独特の美しさがあります。それを知っている人のあいだでは、ごく簡単な表現でもその美しさを伝えることができるのです。他方、その「ふくらみ」を共有しない人、雨中のあじさいを見たことのない人にその美しさを言葉で伝える場合のことを考えてみますと、言葉はその力を一挙に喪失します。いくら言葉を尽くしても、その美しさを伝えることはできません。

経験と言葉のあいだには、先ほど述べましたように、超えがたい大きな間隙があります。しかし、私たちはその「ふくらみ」を手がかりにして、この間隙を飛び越えることができます。たとえば詩歌は、そのような試みの一つの典型であると言えるでしょう。

言葉は「こと」をいきいきと喚起する力をもっていると言いました。詩歌はその力を利用して成り立っています。

たとえば松尾芭蕉（一六四四—一九四）に「行春を近江の人とおしみける」という句があります。一六九〇（元禄三年）に作られた句です。「奥の細道」の旅を終えた翌年ですが、芭蕉は春を琵琶湖畔で過ごしたようです。『去来抄』にこの句について弟子の江左尚白が語った言葉が引かれています。「近江は丹波にも、行く春は行く歳にも、振るべし」というものです。つまり、この句の「近江」「春」は「丹波」「歳」と言いかえてもよいと言いますが、しかしやはり「近江の人」というのがこの句の眼目だと言えるでしょう。丹波の人ではなく、近江の人と行く春を惜しんだということが、この句を成り立たしめていると思います。

暖かい春の光、その光をさらきらと反射する琵琶湖のさざ波、暖められてもうろうと霞む湖面、その先にある比叡や比良の山並み、そのうらかな情景のなかだからこそ、いつそう行く春が惜しまれるのです。この句はただ単に、行く春をたまたま近江の人と惜しんだという事実を詠んだものではありません。この句を読んだ人が、「近江の人」という言葉を軸にして、いま述べたような情景をありありと思ひ浮かべることができることに、この句の秀句たるゆえんがあると思ひます。

この句もそうですが、詩が用いる一つ一つの言葉は特別なものではありません。私たちが日常の会話で用いるものと同様、「もの」を言い表します。しかし、言葉の喚起機能を活かして、そこに「こと」の世界をくり広げていきます。とくに俳句や短歌はごくわずかの言葉しか使いませんが、それを読む人のうちに限りない「こと」を喚び起こし、無限に大きな「こと」の世界を切り開いていきます。逆に言えば、それを読む人は、一つ一つの言葉を読みながら、その先に無限の「こと」を見ます。言葉を踏み越えて無限の「こと」の世界に参入すると言つてもよいかもしれませぬ。そこに詩の力があります。

（藤田正勝著『哲学のヒント』による。一部省略がある。）

（注） ※近江……現在の滋賀県。

※『去来抄』……江戸時代に書かれた書物。

※丹波……現在の京都府中部と兵庫県北東部。

※ゆえん……理由。わけ。

問1 「空が赤く染まった」とありますが、筆者の考えでは、この表現はどのようなことを言い表していますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 「私」に「空が赤く染まる」という変化を意識させるといふことを言い表している。
- イ 「私」が「空が赤く染まる」ということを経験していることを言い表している。
- ウ 「空」に「赤く染まる」という変化が生じたといふことを言い表している。
- エ 「空」が「赤く染まる」といふ変化を主観的にとらえるといふことを言い表している。

問2 言葉と私たちの経験、あるいは「こと」とのあいだには積極的な関係もまた存在します。とありますが、筆者がこのように考える理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 言葉には、ものをグループ分けする働きがあるから。
- イ 言葉は、「こと」を喚起する力をもっているから。
- ウ 言葉は、「こと」をそのものとして表現するから。
- エ 言葉は、言葉による凝固作用によって変質するものだから。

問3 私たちの具体的な経験のなかで使われる言葉はすべて、背後にこの「ふくらみ」をもっています。とありますが、次の表は、言葉と「ふくらみ」の関係を、「日常生活のなか」と「美的な経験の現場」に着目してまとめたものです。空欄ア～ウにあてはまる言葉を本文中から探し、それぞれ二字で書き抜きなさい。なお、同じ言葉を何度使ってもかまいません。(各2点)

	言葉	
日常生活のなか	主要な関心の対象になる。	「ア」 になる場合が多い。
美的な経験の現場	「イ」 になる。	「ウ」 になる。

問4 ④ とくに俳句や短歌はごくわずかの言葉しか使いませんが、それを読む人のうちに限りない「こと」を喚び起こしとありますが、次は、この内容を松尾芭蕉の句を使って説明したものです。空欄にあてはまる内容を、四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。(6点)

「行春を近江の人とおしみける」といふ句の中で、

--	--	--	--

55 とくぐりこと。

--	--	--	--

45

問5 本文に書かれている内容と違うものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 言葉に事柄の抽象化が伴うのは、言葉は私たちが直接経験している事柄を一つの粹のなかに押し込めて表現するからである。

イ 言葉で、あるものの美しさを伝える場合、「ふくらみ」を共有するかもしれないかで、伝わり方は異なる。

ウ 経験と言葉のあいだには大きな隔たりがあるが、詩歌の世界では「ふくらみ」を手がかりにして、その隔たりを超えることができる。

エ 日常用いられる言葉を活かして「もの」のイメージをつくり、新しい意味づけを行っていくところに詩の力がある。

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)(12点)

実綱が、伊予の守にくだり侍りけるに、歌好む者にて、能因法師をぐして、
誘い同行して

伊予にくだりて侍りけるに、その年、世の中日照りして、いかにも雨降らざりけり。
どうしても

その中にも伊予の国は、ことのほかに焼けて、国のうちに水絶えて、

飲みなむずる水だになかりければ、水に飢えて死ぬる者あまたありければ、守実綱、嘆きに思ひて、
飲み水さえも

① 祈りさわぎけれど、いかにもしるしも見えざりければ、思ひわづらひて能因法師に、
少しの効果もあらわれなかつたので

「神は、歌にめでさせ給ふものなり。三島の明神に、歌詠みてまゐらせて、雨祈れ。」
和歌を賞美されるものであると聞いている

② とせめければ、ことに清まはりて、いろいろの御幣に書きつけて、御社に参りて、
心身を清めて

③ 伏し拝みけるほどに、にはかに曇りふたがりて、おほきなる雨降りて、堪へがたきまで止まず。

天の川苗代水にせきくたせあまくだります神ならばかみ
あまの天上の天の川の水をせきとめて、この伊予の国の苗代水として下ろしてくださいませ。
もし三島大明神が、天上からこの伊予に天くだりなされた神ならば。

(「俊頼髓脳」による。)

(注) ※伊予の守……現在の愛媛県にあたる伊予の国の長官。

※守……ここでは、「伊予の守」のこと。

※三島の明神……伊予の国にある神社。ここでは、「三島大明神」のこと。

※御幣……神にささげるものの総称。

問1 傍線A～Cの主語の組み合わせとして正しいものを、次のA～Eの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- | | | | |
|---|--------------------------|-------------------------------|--------|
| ア | A 実綱 <small>さねつな</small> | B 能因法師 <small>のういんほふし</small> | C 能因法師 |
| イ | A 実綱 | B 実綱 | C 能因法師 |
| ウ | A 能因法師 | B 実綱 | C 実綱 |
| エ | A 能因法師 | B 能因法師 | C 実綱 |

問2 祈りさわぎけれど^①とありますが、ここではどのようなことを祈っているのですか。次の空欄^{くわんらん}にあてはまる内容を書きなさい。(3点)

こと。

問3 わづらひて^②とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。

(3点)

問4 次は、この文章を読んだあとの先生とSさんの会話です。空欄にあてはまる内容として最も適切なものを、あとのA～Eの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

Sさん 「『古今和歌集』の冒頭^{ぼうとう}には、『やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。』と書かれていましたね。」

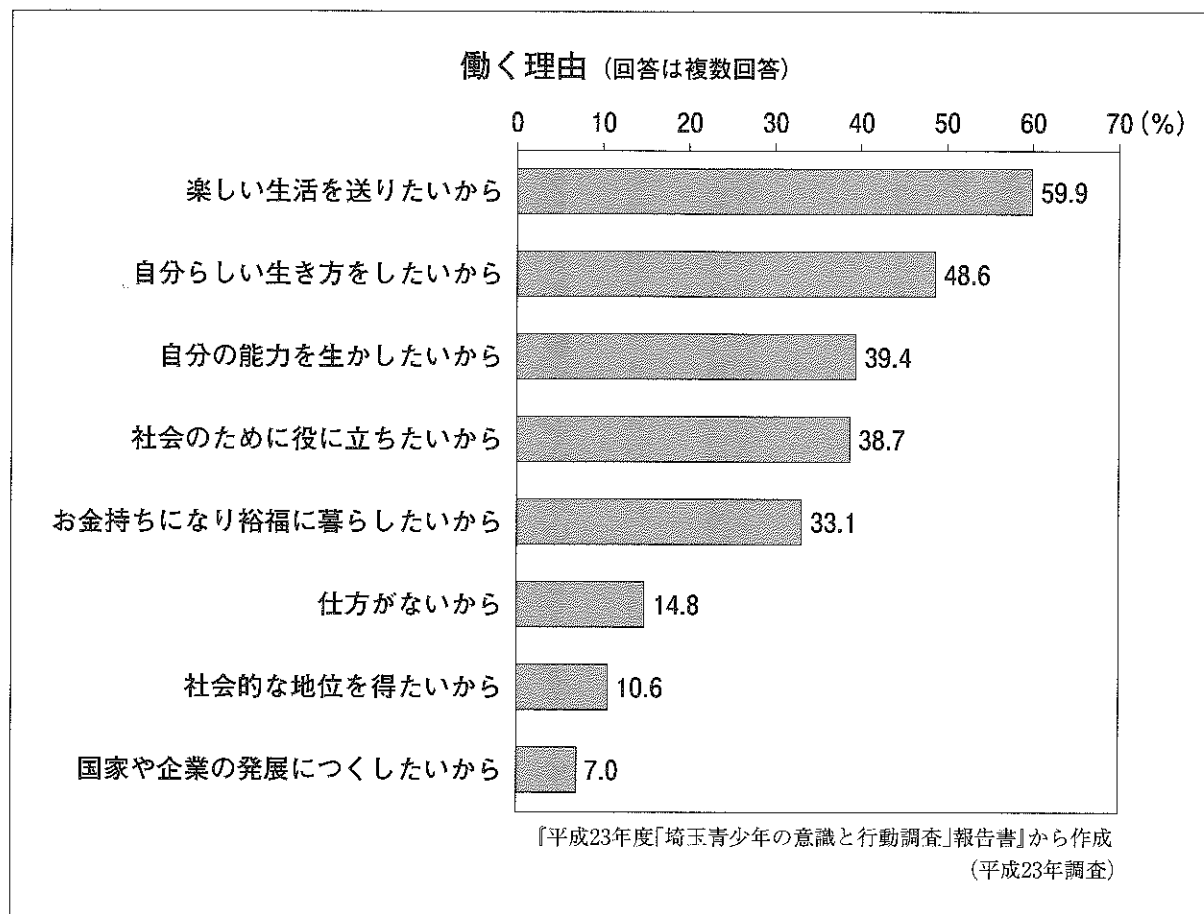
先生 「そのあとに、和歌は、目に見えない神々の心を動かし、男女を親しくさせ、勇猛な武士の心もやわらげる、と述べられていますよ。」

Sさん 「そうですね。『古今和歌集』の冒頭もこの文章も、 について述べている点^{ちてん}が共通しているのですね。」

- ア 和歌の伝統 イ 和歌の心情 ウ 和歌の起源 エ 和歌の効用

5

次の資料は「働く理由」について、県内の高校生を対象に調査し、その結果をまとめたものです。国語の授業で、この資料をもとに「働くこと」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。(16点)



(注意)

- (1) 段落や構成に注意して、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえて書くこと。
- (2) 文章は、十三行以上、十五行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(以上で問題は終わりです。)

